

2 検 査 情 報

(1) 三類感染症

ア 検査対象

医師からの届出により医療衛生企画課が調査し、病原体検査のために採取した検体で、衛生環境研究所に送付された表1に示す353検体について検査を実施した。なお、コレラ菌、赤痢菌、パラチフスA菌及びチフス菌については、コレラ汚染地域への渡航者が消化器系感染症を発症した場合などに、患者、患者との接触者、旅行の同行者について検査を実施する。

表1 三類感染症病原体検査 取扱件数及び項目数

検体数		353 (ふん便	325 , 菌株	28)	陽性数
検査項目	コレラ菌	0 (ふん便	0 , 菌株	0)	0
	赤痢菌	0 (ふん便	0 , 菌株	0)	0
	パラチフスA菌	0 (ふん便	0 , 菌株	0)	0
	チフス菌	0 (ふん便	0 , 菌株	0)	0
	EHEC	353 (ふん便	325 , 菌株	28)	42
合計		353 (ふん便	325 , 菌株	28)	42

イ 検査方法

常法により直接又は増菌培養した後に寒天培地に接種し、分離菌について生化学的性状と血清反応等による同定を行った。腸管出血性大腸菌については、免疫クロマト法（以下「IC法」という。）及び逆受身ラテックス凝集反応法による毒素検出とPCR法による毒素遺伝子の確認を行った。また、医療機関などで検出された菌株についても、同様に同定を行った。

ウ 結果

腸管出血性大腸菌は、患者及び接触者等のふん便325検体から14株を分離した。また、医療機関で分離された菌株28株（疑い事例を含む）が当所に搬入され、28株を分離した。検査を行った計42株の血清型及び毒素型は表2のとおりであった。

表2 腸管出血性大腸菌の血清型別の検出状況

血清型（毒素型）	株数	血清型（毒素型）	株数
O4 : H2(VT2)	3株	O157 : H7 (VT2)	13株
O6 : H34 (VT1+2)	1株	O157 : H7 (VT1+2)	5株
O26 : H11 (VT1)	1株	O157 : HNM (VT1+2)	17株
O103 : H2 (VT1)	1株	合計	42株
O115 : H10 (VT1)	1株		

(2) 四類感染症

ア デングウイルス

(ア) 検査対象

医師からの届出により医療衛生企画課が調査し、病原体検査のために採取した検体で、衛生環境研究所に送付されたもの（血液）を検査対象とする。

(イ) 検査方法

デングウイルスの非構造タンパク抗原検査（以下「NS1」という。）については、医療機関での検査が未実

施の血液検体を対象に、検査キットに添付のマニュアルに従い行う。遺伝子検査は、国立感染症研究所のデングウイルス感染症診断マニュアルに準じ、検体から RNA を抽出し、リアルタイム RT-PCR 法により行う。

(ウ) 結果

令和3年次におけるデングウイルスの検査件数は0件であった。

イ 重症熱性血小板減少症候群 (SFTS) ウイルス

(ア) 検査対象

医師からの届出により医療衛生企画課が調査し、病原体検査のために採取した検体で、衛生環境研究所に送付されたもの（血液、鼻咽頭ぬぐい液、尿）を検査対象とした。

(イ) 検査方法

検査は、国立感染症研究所の SFTS ウイルス検査マニュアルに準じ、検体から RNA を抽出し、RT-PCR 法により行った。

(ウ) 結果

9月に1事例（1名3検体）の検査を実施したが、SFTS ウイルスは検出されなかった。

ウ A型肝炎ウイルス

(ア) 検査対象

医師からの届出により医療衛生企画課が調査し、病原体検査のために採取した検体で、衛生環境研究所に送付されたもの（ふん便）を検査対象とする。

(イ) 検査方法

検体を常法により前処理した後、RNA を抽出し、RT-PCR 法により遺伝子検出を行う。

(ウ) 結果

令和3年次におけるA型肝炎ウイルスの検査件数は0件であった。

(3) 五類感染症

ア 感染性胃腸炎患者集団発生事例（図1、表3/p.72）

(ア) 検査対象

高齢者福祉施設等からの届出により医療衛生企画課が調査し、病原体検査のために採取した検体で、衛生環境研究所に送付されたもの（ふん便）を検査対象とした。

(イ) 検査方法

検体を常法により前処理した後、RNA を抽出し、リアルタイム RT-PCR 法によりノロウイルスの遺伝子検出を行った。また、必要に応じて、リアルタイム RT-PCR 法でサポウイルスの遺伝子検出を、IC 法でロタウイルス、アデノウイルスの抗原検出を行った。

(ウ) 結果と考察

図1及び表3に示すとおり、令和3年は、1月に2施設、2月に7施設、3月に6施設、4月に6施設、5月に9施設、6月に3施設、7月に3施設、8月に1施設、11月に2施設、12月に12施設、の計51施設の

集団感染事例が発生し、患者便・吐物 212 検体を採取し検査を行った。そのうち、46 施設 158 検体からノロウイルス GII、1 施設 3 検体からノロウイルス GI、3 施設 13 検体からサポウイルスを検出した。

表 3 感染性胃腸炎患者集団発生事例における病原体検出状況

月	週	行政区	施設	検体数	陽性数	検出検体	
1	2	北区	保育園	患者便	5	4	ノロウイルスGII
	3	北区	保育園	患者便	5	4	ノロウイルスGII
2	5	北区	保育園	患者便	5	4	ノロウイルスGII
	5	左京区	保育園	患者便	5	3	ノロウイルスGI
	5	右京区	保育園	患者便	3	3	ノロウイルスGII
	6	右京区	保育園	患者便	4	4	ノロウイルスGII
	6	南区	保育園	患者便	3	3	ノロウイルスGII
	7	中京区	保育園	患者便	4	4	ノロウイルスGII
	8	南区	保育園	患者便	3	3	ノロウイルスGII
3	9	深草	保育園	患者便	3	3	ノロウイルスGII
	10	北区	高齢者福祉施設	患者便	3	2	ノロウイルスGII
	10	右京区	保育園	患者便	5	5	ノロウイルスGII
	11	下京区	保育園	患者便	6	3	ノロウイルスGII
	11	醍醐	保育園	患者便	5	5	ノロウイルスGII
	13	中京区	保育園	患者便	3	3	ノロウイルスGII
4	16	上京区	保育園	患者便	5	4	ノロウイルスGII
	17	中京区	保育園	患者便	4	4	ノロウイルスGII
	17	右京区	保育園	患者便	3	3	ノロウイルスGII
	17	左京区	保育園	患者便	3	2	ノロウイルスGII
	17	南区	保育園	患者便	5	5	ノロウイルスGII
	17	上京区	保育園	患者便・吐物	2	2	ノロウイルスGII
5	18	南区	保育園	患者便	4	4	ノロウイルスGII
	18	右京区	保育園	患者便	3	2	ノロウイルスGII
	19	西京区	保育園	患者便	4	3	ノロウイルスGII
	19	中京区	保育園	患者便	4	2	ノロウイルスGII
	20	山科区	保育園	患者便	5	4	ノロウイルスGII
	20	右京区	保育園	患者便	4	3	ノロウイルスGII
	20	上京区	小学校	患者便	5	4	ノロウイルスGII
	20	右京区	保育園	患者便	3	3	ノロウイルスGII
	21	南区	保育園	患者便	5	5	ノロウイルスGII
6	23	右京区	保育園	患者便	3	3	ノロウイルスGII
	24	右京区	保育園	患者便	3	3	ノロウイルスGII
	26	醍醐	保育園	患者便	5	4	ノロウイルスGII
7	28	左京区	保育園	患者便	3	3	ノロウイルスGII
	28	西京区	保育園	患者便	5	0	
	29	山科区	保育園	患者便	2	2	ノロウイルスGII
8	32	北区	保育園	患者便	3	3	ノロウイルスGII
11	48	深草	保育園	患者便	5	4	ノロウイルスGII
	48	左京区	保育園	患者便	13	10	ノロウイルスGII
12	49	西京区	保育園	患者便	4	4	ノロウイルスGII
	49	洛西	小学校	患者便	4	4	ノロウイルスGII
	49	西京区	保育園	患者便	4	4	サポウイルス
	49	中京区	保育園	患者便	5	3	ノロウイルスGII
	50	上京区	小学校	患者便	7	6	サポウイルス
	50	洛西	高齢者福祉施設	患者便	3	2	ノロウイルスGII
	50	伏見区	保育園	患者便	3	3	ノロウイルスGII
	51	山科区	保育園	患者便	3	3	ノロウイルスGII
	51	山科区	保育園	患者便	4	1	ノロウイルスGII
	52	左京区	保育園	患者便	5	4	ノロウイルスGII
	52	左京区	保育園	患者便	3	3	サポウイルス
	52	伏見区	高齢者福祉施設	患者便	4	2	ノロウイルスGII
合計					212	174	

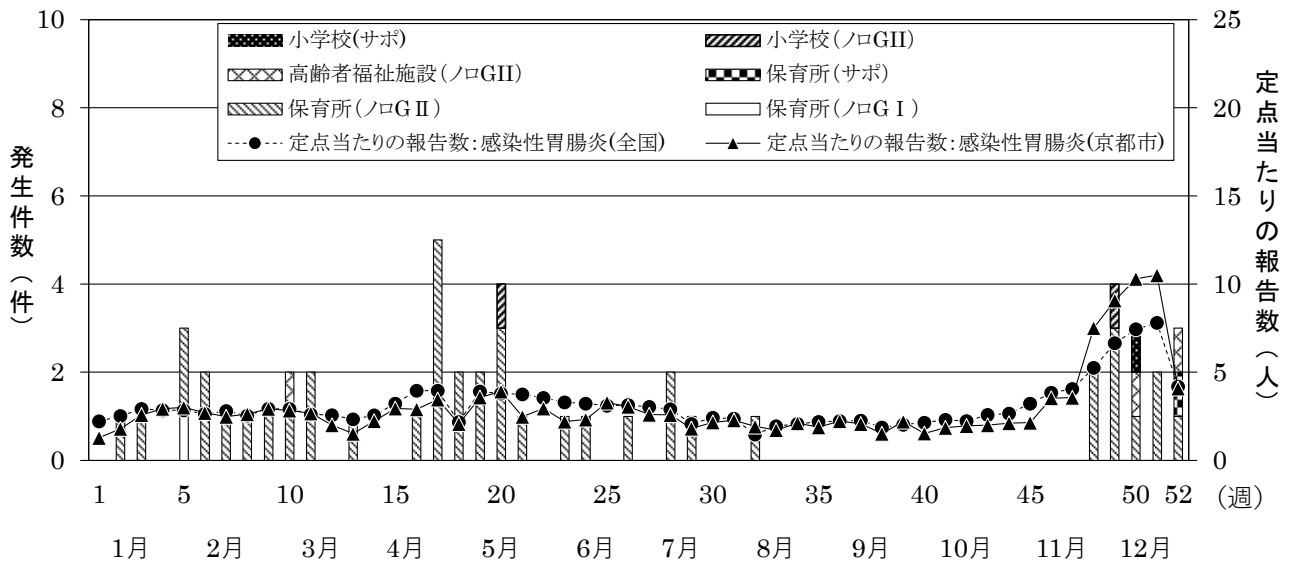


図1 感染性胃腸炎の集団発生事例における発生施設及び病因物質別の発生状況(令和3年)

イ 麻しんウイルス

(ア) 検査対象

医師からの届出により医療衛生企画課が調査し、病原体検査のために採取した検体で、衛生環境研究所に送付されたもの(鼻咽頭ぬぐい液、尿、血液)を検査対象とした。

なお、風しんとして届出のあった検体についても、検査対象とした。

(イ) 検査方法

検査は、国立感染症研究所の病原体検出マニュアル麻しんに準じ、検体からRNAを抽出し、RT-PCR法又はリアルタイムRT-PCR法による遺伝子検出を行った。また、培養細胞B95a細胞によるウイルス分離を行った。

(ウ) 結果

8月に1事例(1名2検体)、9月に1事例(1名2検体)、11月に1事例(1名3検体)、12月に1事例(1名3検体)の計10検体について検査を行ったが、麻しんウイルス及び風しんウイルスは検出しなかった。

ウ 劇症型溶血性レンサ球菌感染症

(ア) 検査対象

医師からの届出により医療衛生企画課が調査し、衛生環境研究所に送付された検体(医療機関等で検出された菌株)について検査を実施した。

(イ) 検査方法

検査は、溶血性レンサ球菌の分離培養及び生化学的性状等検査、Lancefield群別及びT型別(A群のみ)の血清学的検査を行った。検査終了後は、詳細な解析を行うため、当所で分離した菌株を溶血性レンサ球菌レファレンスセンターの地方独立行政法人大阪健康安全基盤研究所に送付した。

(ウ) 結果

1月に1事例（1名1検体）、2月に1事例（1名1検体）、4月に1事例（1名1検体）、6月に1事例（1名1検体）、7月に3事例（3名3検体）、8月に1事例（1名1検体）、10月に2事例（2名2検体）の計10検体について検査を行い、1月の1事例（1名1検体）からA群溶血性レンサ球菌T1型を1株、6月の1事例（1名1検体）からTB3264型を1株、2月の1事例（1名1検体）、4月の1事例（1名1検体）及び8月の1事例（1名1検体）からT型別不明を3株、7月の3事例（3名3検体）及び10月の2事例（2名2検体）からG群溶血性レンサ球菌を5株、それぞれ検出した。

（4）京都市感染症発生動向調査事業における病原体検査（定点医療機関分）

ア 検査対象感染症

令和3年1月から12月までに病原体検査を行った疾病は、感染性胃腸炎、ヘルパンギーナ、感染性髄膜炎、咽頭結膜熱、手足口病、RSウイルス感染症、その他（上気道炎）の計7疾病であった。

イ 検査材料

検査材料は、市内4箇所の病原体定点（小児科定点4箇所、インフルエンザ定点4箇所、眼科定点1箇所、基幹定点1箇所）の医療機関の協力により採取されたもので、患者60名から表4に示す検査材料について検査を行った。なお、令和3年は令和2年に続き、新型コロナウイルス感染症の流行下で、全国的に感染症対策がなされた影響等により、例年に比べ検査材料が非常に少ない状況となった。

ウ 検査方法

（ア）ウイルス検査

検体を常法により前処理した後、培養細胞（FL「ヒト羊膜由来細胞」、RD-18S「ヒト胎児横紋筋腫由来細胞」、Vero「アフリカミドリザル腎由来細胞」）を用いてウイルス分離を行った。インフルエンザウイルスの分離には、培養細胞（MDCK「イヌ腎由来細胞」）を使用した。

分離したウイルスの同定には中和反応、ダイレクトシーケンス法、蛍光抗体法（以下「FA法」という。）、リアルタイムRT-PCR法等を用いた。

（イ）細菌検査

常法により、ふん便から下痢原性大腸菌、サルモネラ属菌、黄色ブドウ球菌などの食中毒や感染性胃腸炎の起因菌を、鼻咽頭ぬぐい液から溶血性レンサ球菌などの呼吸器感染症の起因菌の分離を行った。

表4 検査材料別・ウイルス及び細菌別の検査実施状況

		ウイルス	細菌	全数
受付患者数		60	31	60
検査材料	ふん便	31	27	31
	鼻咽頭ぬぐい液	21	0	21
	髄液	10	4	10
	咽頭うがい液	1	0	1
	気管吸引液	1	0	1
	検体合計	64	31	64
病原体検出患者数		11	4	14
病原体の検出株数		11	5	16
患者当たりの検出率(%)		18.3	12.9	23.3

エ 検査結果

(ア) 月別病原体検出状況（小児科、インフルエンザ、眼科、基幹定点）（表 7/p.82）

各月の受付患者数は、3月が最も多く10名で、2月は受付がなかった。年間の受付患者60名のうち14名から16株の病原微生物を検出し、受付患者当たりの検出率は23.3%であった。

ウイルス検査では、被検患者60名中11名から11株のウイルスを検出した。被検患者当たりのウイルス検出率は18.3%であった。検出したウイルスの内訳は、表5のとおりである。

表5 検出したウイルス・細菌の内訳

コクサッキーA群ウイルス	6型3株, 9型2株	2種	5株
アデノウイルス	2型1株	1種	1株
ノロウイルス	GI:1株, GII:1株	2種	2株
RSウイルス	3株	1種	3株
ウイルス		合計	11株
下痢原性大腸菌	EPEC:1株, その他病原性大腸菌:2株	2種	3株
黄色ブドウ球菌	コアグラージェ型別V:1株, VII:1株		2株
細菌		合計	5株

検出ウイルスの季節推移をみると、例年夏季を中心に流行するエンテロウイルスは11月のみ検出した。また、例年年間を通して検出が見られるアデノウイルスは3月のみ検出した。

ノロウイルスは、3月に検出した。

インフルエンザウイルスは検査材料の搬入がなく、検出されなかった。

細菌検査では、被検患者31名中4名から5株の病原細菌を検出し、患者当たりの検出率は12.9%であった。検出した細菌の内訳は表5のとおりである。

黄色ブドウ球菌は3月及び5月に検出し、下痢原性大腸菌は6月に検出した。

(イ) 感染症別病原体検出状況（小児科、インフルエンザ、眼科、基幹定点）（表 8/p.83）

感染性胃腸炎は、受付患者数の50.0%、インフルエンザ、ヘルパンギーナ、咽頭結膜熱、RSウイルス感染症、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎などの呼吸器疾患は、36.7%を占めていた。

主な感染症別の病原体検出率は、手足口病が75.0%、ヘルパンギーナが33.3%、咽頭結膜熱及びRSウイルス感染症が25.0%、感染性胃腸炎が23.3%であった。

主な感染症について、ウイルスの検出状況をみると、感染性胃腸炎では、アデノウイルス1種1株、ノロウイルス2種2株、RSウイルス1株の計4種4株を、ヘルパンギーナでは、エンテロウイルスを1種1株、RSウイルス1株の計2種2株、手足口病では、エンテロウイルス2種3株をそれぞれ検出した。

また、細菌の検出状況をみると、感染性胃腸炎では、黄色ブドウ球菌2株、下痢原性大腸菌3株の計5株を検出した。

(ウ) 年齢階層別病原体検出状況（小児科、インフルエンザ、眼科、基幹定点）（表 9/p.84）

受付患者の年齢階層別分布をみると、0歳が27名(45.0%)で最も多く、次いで1~4歳の14名(23.3%)、10~14歳の10名(16.6%)、5~9歳の8名(13.3%)で、15歳以上は1名(1.7%)であった。

年齢階層別の受付患者当たりの検出率は、0歳が14.8%(ウイルス3種4株、細菌1種2株)、1~4歳が50.0%(ウイルス3種5株、細菌2種2株)、5~9歳が25.0%(ウイルス2種2株)、10~14歳が10.0%(細菌1種1株)、15歳以上が0.0%であった。

エンテロウイルスは1～4歳で2種4株、0歳で1種1株、アデノウイルスは1～4歳で1種1株を検出した。ノロウイルスは0歳で1種1株、5～9歳で1種1株を検出した。RSウイルスは0歳で1株、5～9歳で2株を検出した。

インフルエンザウイルス及びロタウイルスは検出しなかった。

(エ) 主な疾病（臨床診断）と病原体検出状況（表 7/p.82、表 8/p.83、表 9/p.84）

a インフルエンザ（図 2-1、図 2-2）

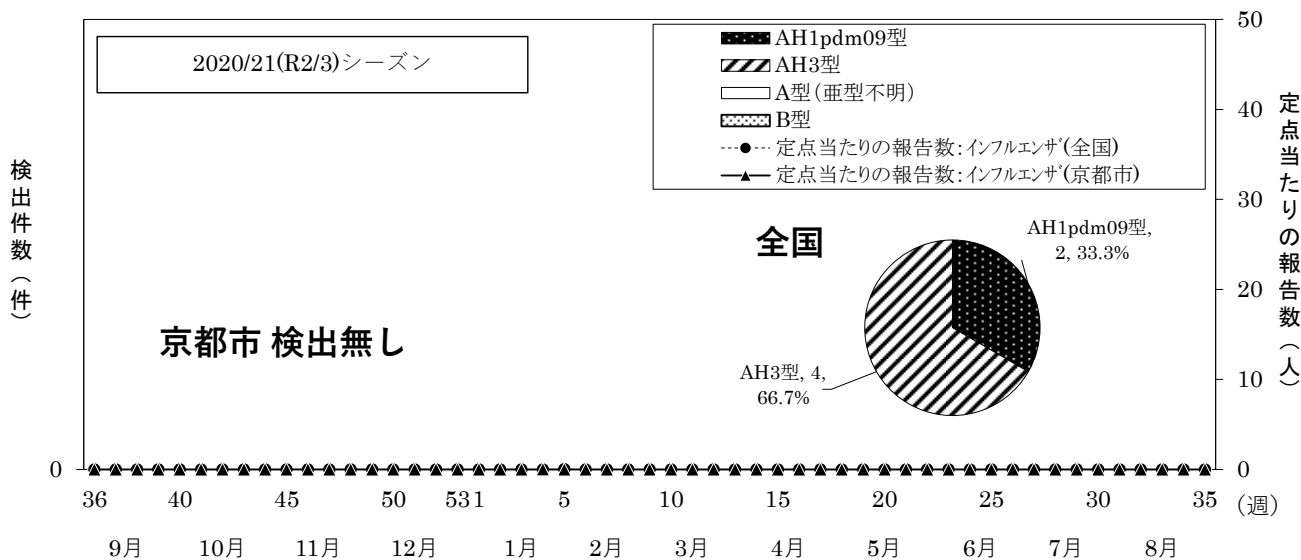


図 2-1 インフルエンザ患者の発生状況とインフルエンザウイルスの検出状況(令和 2 年 9 月～令和 3 年 8 月)

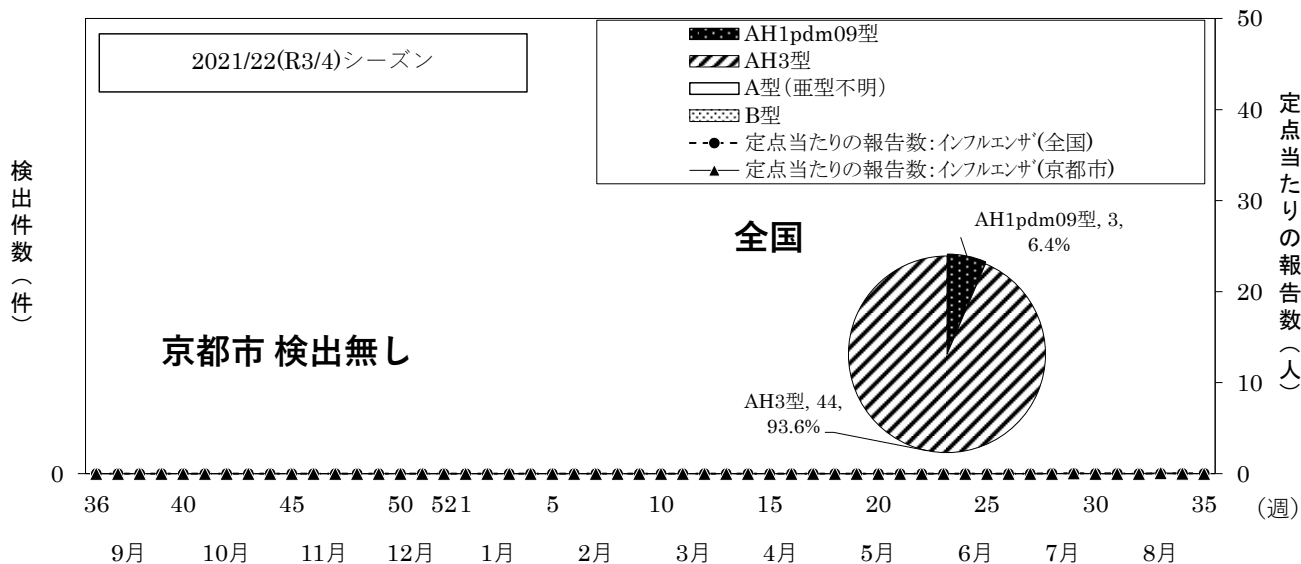


図 2-2 インフルエンザ患者の発生状況とインフルエンザウイルスの検出状況(令和 3 年 9 月～令和 4 年 8 月)

本市感染症発生動向調査患者情報によると、2020/21 (R2/3) シーズン及び 2021/22 (R3/4) シーズンはともに、定ポイント当り報告数が 1.0 を超える週はなく、そのまま終息を迎えた。全国も同様であった。

インフルエンザウイルスの検出状況を見ると、本市では、両シーズンにおけるインフルエンザウイルスの検出はなかった。全国でも、2020/21 (R2/3) シーズンは、ほぼ検出がなく、2021/22 (R3/4) シーズンも AH1pdm09

型を3株、AH3型を44株であった。

b 感染性胃腸炎 (図3-1、図3-2)

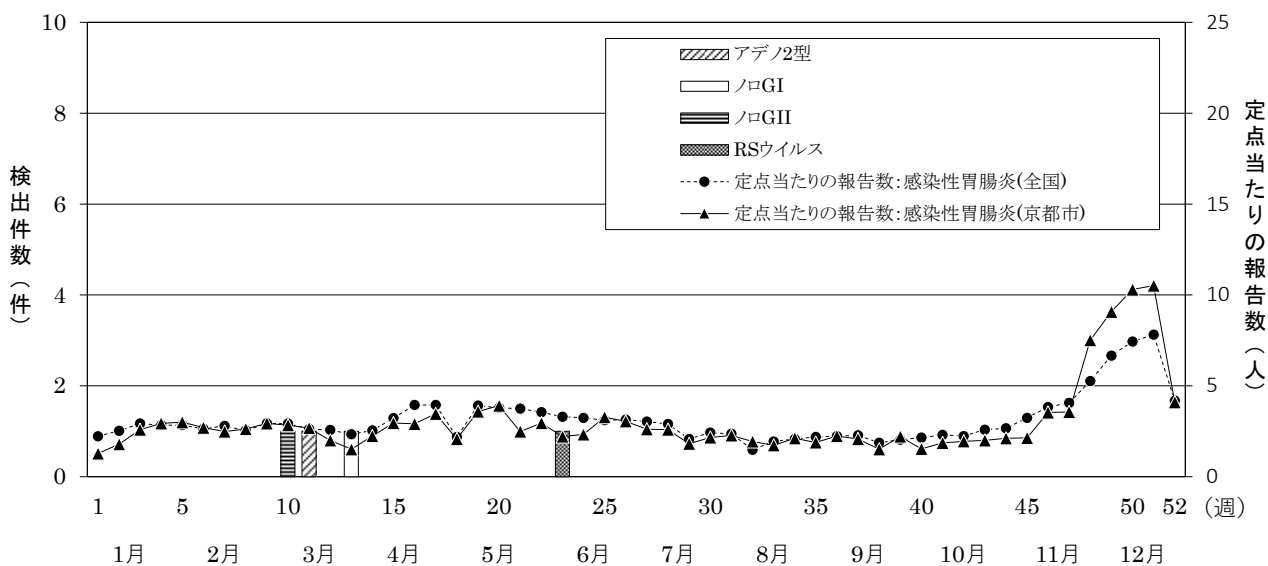


図3-1 感染性胃腸炎患者における病原ウイルスの検出状況(令和3年)

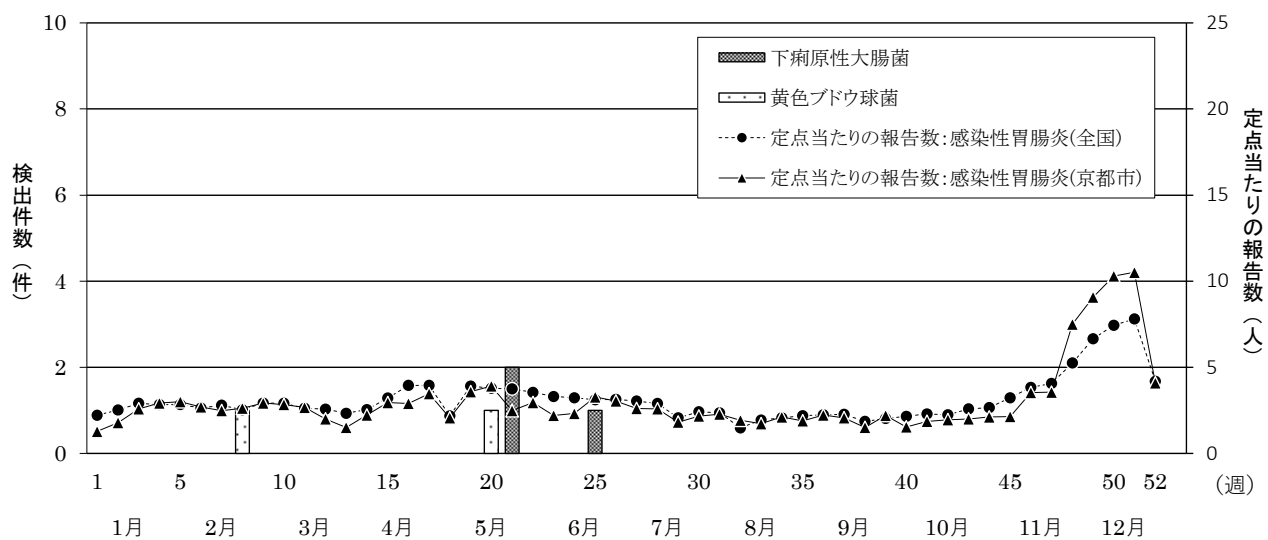


図3-2 感染性胃腸炎患者における病原細菌の検出状況(令和3年)

全国におけるウイルスの検出状況は、ロタウイルスは殆ど検出されず、ノロウイルスは1月～6月及び11月～12月に検出数が多かった。

本市では、臨床診断名が感染性胃腸炎の受付検患者30名のうち7名からウイルス4株及び細菌5株を検出した。

ウイルスでは、3月にノロウイルスのGI及びGIIを各1株、アデノウイルスを1株検出した。ロタウイルス及びエンテロウイルスは検出しなかった。

細菌では、3月及び5月に黄色ブドウ球菌を各1株、6月に下痢原性大腸菌3株検出した。

c RSウイルス感染症 (図4)

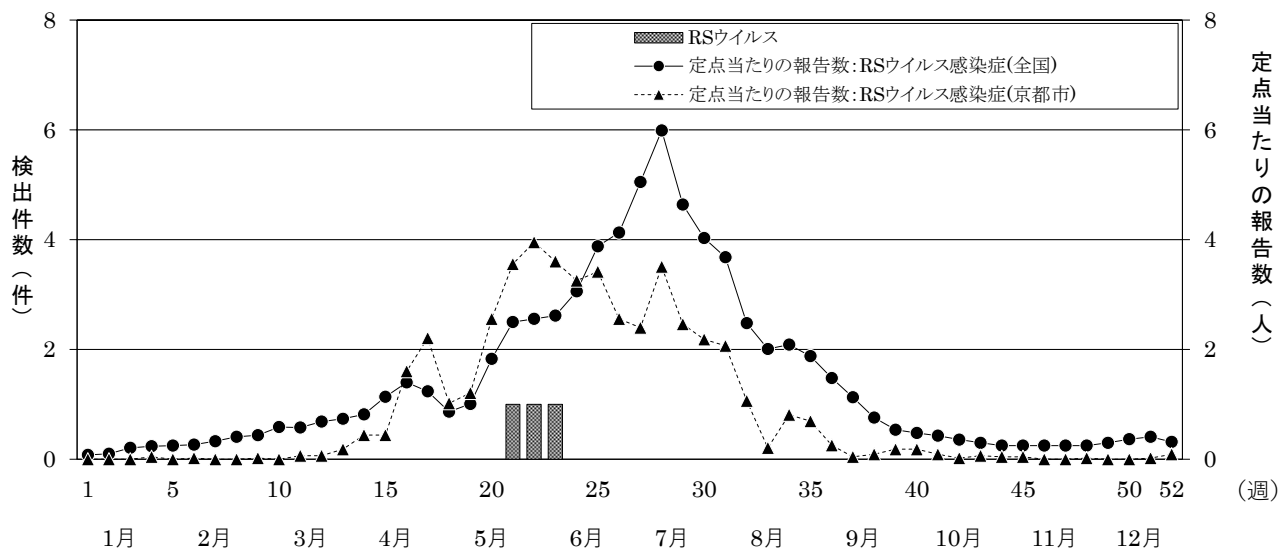


図4 RSウイルス感染症患者におけると病原体の検出状況(令和3年)

本市における臨床診断名がRSウイルス感染症の受付検患者数は12名で、うち3名からRSウイルスを3株検出した他、1名から下痢原生大腸菌2株を検出した。

d 咽頭結膜熱 (図5)

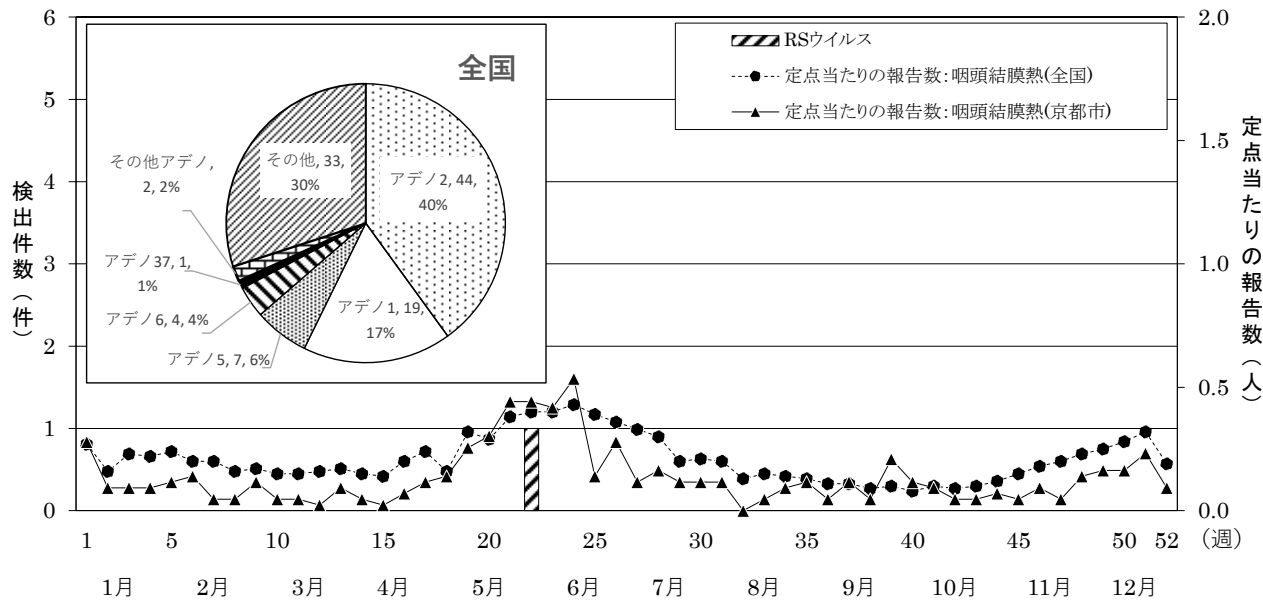


図5 咽頭結膜熱患者発生状況と病原体検出状況(令和3年)

本市における臨床診断名が咽頭結膜熱の受付患者数は4名で、そのうち1名からRSウイルスを1株検出した。

本疾病の原因とされるアデノウイルス1~7型及び11型については検出しなかった。

令和3年の全国の咽頭結膜熱におけるウイルスの検出状況では、アデノウイルス2型が最も多く40.0%、

次いで1型が17.3%、5型が6.4%、6型が3.6%であった。

e A群溶血性レンサ球菌咽頭炎(図6-1、図6-2)

本市における臨床診断名がA群溶血性レンサ球菌咽頭炎の受付患者数は0名で、A群溶血性レンサ球菌は検出しなかった。全国のT血清型別検出比率をみると、劇症型溶血性レンサ球菌感染症事例で検出されることの多いT-1型の検出率は、全国で18.6%であった。

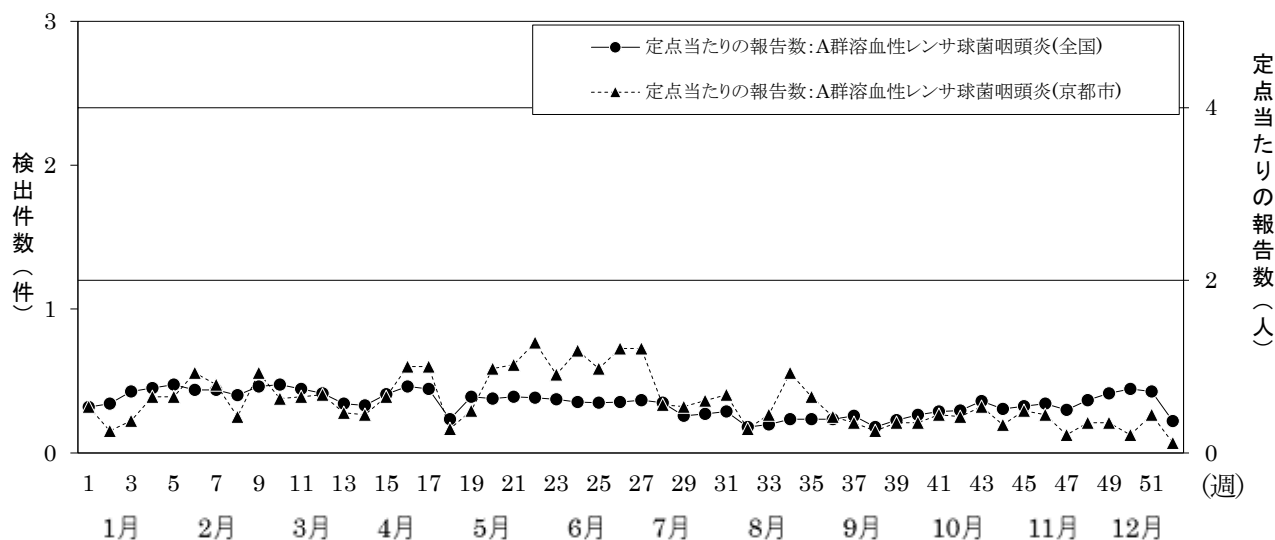


図6-1 A群溶血性レンサ球菌(T血清型別)の検出状況(令和3年)

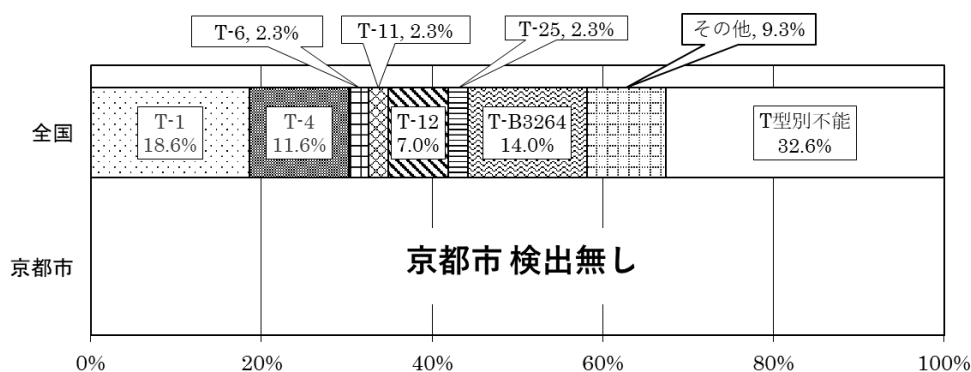


図6-2 A群溶血性レンサ球菌のT血清型別検出比率(令和3年)

f ヘルパンギーナ(図7)

ヘルパンギーナは例年、夏にかけて流行が見られるが、令和3年は本市、全国共に9月から緩やかに増加し始め、10月(第41週)に小さなピークを示して以降、減少した。

臨床診断名がヘルパンギーナの受付患者数は6名で、そのうち2名から2株のウイルスを検出した。病原体の内訳は、コクサッキーA群ウイルス6型が1株、RSウイルスが1株であった。

全国の病原体検出状況を表6に示した。令和3年は、コクサッキーA群ウイルス4型(50.0%)、6型(14.3%)、10型(2.0%)の順にウイルスが検出された。

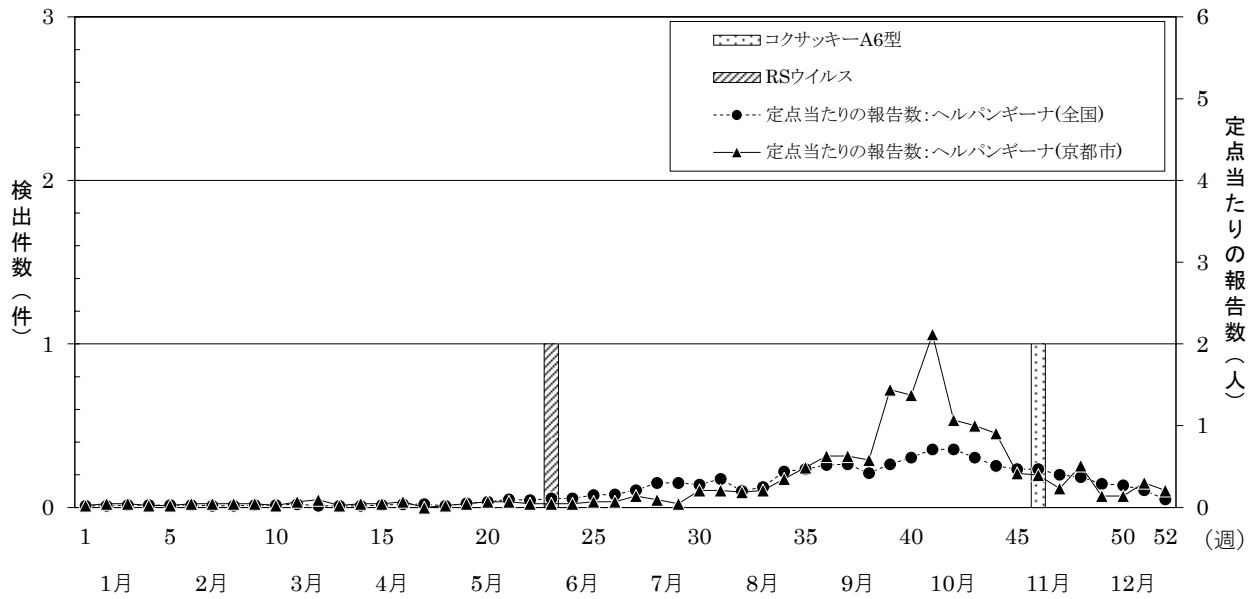


図7 ヘルパンギーナ患者における病原ウイルスの検出状況(令和3年)

年	CA4	CA5	CA6	CA10	CA16	CB5	その他
2021	98	0	28	4	0	0	66
2020	49	0	0	14	0	0	67
2019	18	73	210	30	19	10	237
2018	195	23	12	84	14	7	385
2017	6	14	175	137	5	3	245

表6 ヘルパンギーナ疾病患者から検出したコクサッキーA群及びB群ウイルスの型別内訳(全国)(人)

g 手足口病(図8)

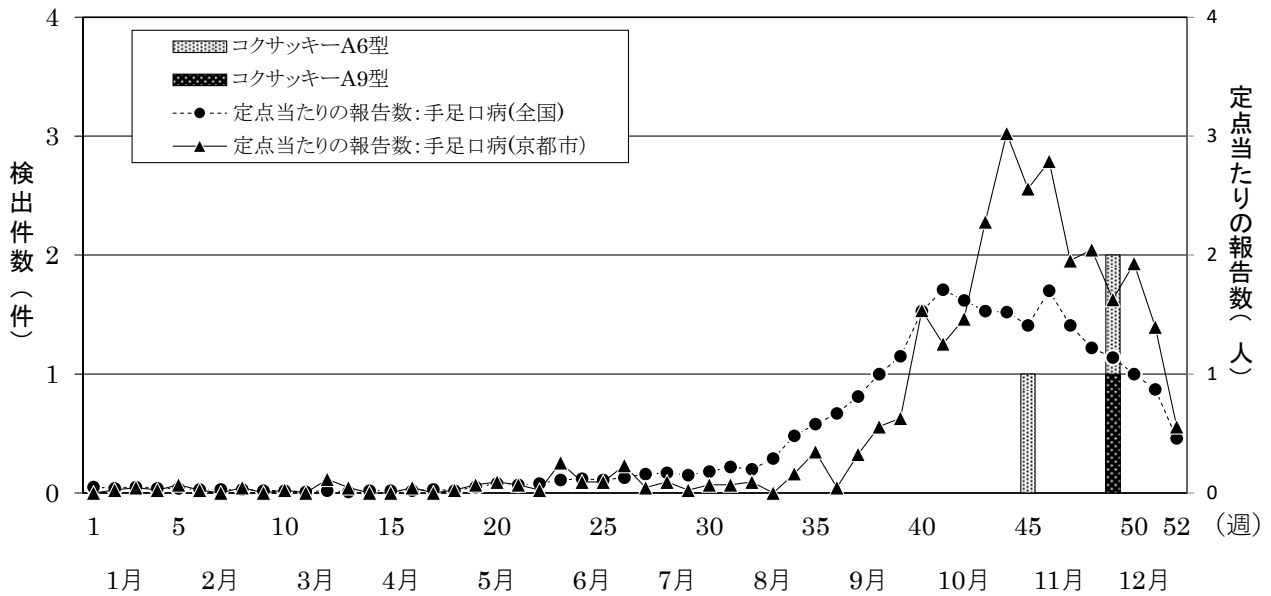


図8 手足口病患者における病原ウイルス検出状況(令和3年)

手足口病は例年、7月にピークが見られるが、令和3年は本市、全国共に9月から緩やかに増加し始め、本市は10月（第44週）、全国は10月（第41週に）にピークを示して以降、減少した。

手足口病を引き起こすウイルスとしては、コクサッキーA群ウイルス6型、10型、16型、エンテロウイルス71型が代表に挙げられるが、本市では、臨床診断名が手足口病の受付患者数は4名で、そのうち3名からコクサッキーA群ウイルス6型を2株、9型を1株検出した。エンテロウイルス71型は検出しなかった。

また、全国では、コクサッキーA群ウイルス6型が244株(65.2%)、16型が27株(7.2%)、10型が2株(0.5%)、その他28株(39.4%)の計71株であった。

(オ) 検体別・検出方法別病原ウイルス検出状況(表10/p.85)

コクサッキーウイルスA群は6型を3株、9型の2株を遺伝子検査によりウイルス遺伝子を検出した。

アデノウイルスは、2型の1株がFL細胞で分離された。

ノロウイルスGI及びGIIを各1株及びRSウイルス3株を遺伝子検査によりウイルス遺伝子を検出した。

培養細胞法によるウイルスの検査体制はほぼ確立されているが、被検患者から採取した検体中に活性のあるウイルスが存在していることが必須条件となり、採取後の温度や期間等の保管条件によっては失活し検出できなくなる。また、分離困難なウイルスも存在するといった欠点がある。

感染症発生動向調査においても、迅速な実験室診断が要請される傾向は年々ますます強まっており、検出率と迅速性の向上を目指して、培養細胞法と並行して可能な限り新たな検査技術の導入を図っていかねばならないと考える。

オ まとめ

(ア) 京都市感染症発生動向調査事業における病原体検査（定点医療機関分）では、受付患者60名のうち14名(23.3%)から病原体を検出した。ウイルスでは、被検患者60名中11名(18.3%)から、コクサッキーA群、アデノ、ノロ、RSのウイルス6種類11株を検出した。細菌では、被検患者31名中4名(12.9%)から、黄色ブドウ球菌、下痢原性大腸菌の細菌5株を検出した。

(イ) 感染症別病原体の検出率は、疾病の種類により異なり、手足口病が75.0%、ヘルパンギーナが33.3%、咽頭結膜熱及びRSウイルス感染症がそれぞれ25.0%、感染性胃腸炎が23.3%であった。

(ウ) 新型コロナウイルス感染症流行の影響により、例年に比べて受付患者数が非常に少なかったため、ウイルス及び細菌の検出数も少ない年となった。

(エ) 年齢階層別病原体検出状況では、1~4歳の検出率が最も高く50.0%で、次いで5~9歳の25.0%、0歳の14.8%、10~14歳の10.0%であった。受付患者数では、0歳が27名(45.0%)と最も多かった。

表7 月別病原体検出状況(小児科、インフルエンザ、眼科、基幹定点)

検体採取月		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計		病原 体 検 出 比 率 (%)
検査材料																
総受付患者数		2	0	10	7	8	6	8	4	3	4	6	2	60		
ふん便		1	0	7	1	4	6	6	1	2	2	1	0	31		
鼻咽喉ぬぐい液		1	0	3	4	3	1	2	0	0	1	4	2	21		
髄液		0	0	1	1	0	0	0	3	1	3	1	0	10		64
咽頭うがい液		0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1		
気管吸引		0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1		
病原体検出患者数		0	0	4	0	3	2	0	0	0	0	5	0	14		
患者当たりの検出率(%)		0.0	0.0	40.0	0.0	37.5	33.3	0.0	0.0	0.0	0.0	83.3	0.0	23.3		
被検患者数		2	0	10	7	8	6	8	4	3	4	6	2	60		
検出患者数		0	0	3	0	2	1	0	0	0	0	5	0	11		
患者当たりの検出率(%)		0.0	0.0	30.0	0.0	25.0	16.7	0.0	0.0	0.0	0.0	83.3	0.0	18.3		
ウイルス																
エンテロ																
コクサッキーA6型																
コクサッキーA9型																
アデノ																
アデノ2型																
ノロウイルスGI型																
ノロウイルスGII型																
RSウイルス																
小計		0	0	3	0	2	1	0	0	0	0	5	0	11		18.8
被検患者数		1	0	7	1	4	6	6	3	2	0	1	0	31		
検出患者数		0	0	1	0	1	2	0	0	0	0	0	0	4		
患者当たりの検出率(%)		0.0	0.0	14.3	0.0	25.0	33.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	12.9		
細菌																
黄色ブドウ球菌																
下痢原性大腸菌																
小計		0	0	1	0	1	3	0	0	0	0	0	0	5		12.5
合計		0	0	4	0	3	4	0	0	0	0	5	0	16		18.8
																100.0

表 8 感染症別病原体検出状況(小児科、インフルエンザ、眼科、基幹定点)

令和3年1月～12月

疾病名	感染性胃腸炎	インフルエンザ	ヘルパンギーナ	咽頭結膜熱	手足口病	感染性髄膜炎	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	流行性角結膜炎	流行性耳下腺炎	RSウイルス感染症	その他	計(重複有)	計(重複無)		病原体検出比率(%)		
総受付患者数	30	0	6	4	4	10	0	0	0	12	1	67	60				
検査材料	ふん便	28	0	3	0	0	2	0	0	0	1	0	34	31	64		
	鼻咽頭ぬぐい液	2	0	4	3	4	1	0	0	0	11	0	25	21			
	髄液	1	0	0	0	0	10	0	0	0	0	0	11	10			
	咽頭うがい液	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	1			
	気管吸引	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	2	1			
病原体検出患者数	7	0	2	1	3	1	0	0	0	3	0	17	14				
患者当たりの検出率(%)	23.3	0.0	33.3	25.0	75.0	10.0	0.0	0.0	0.0	25.0	0.0	25.4	23.3				
ウイルス	被検患者数	30	0	6	4	4	10	0	0	0	12	1	67	60			
	検出患者数	4	0	2	1	3	1	0	0	0	3	0	14	11			
	患者当たりの検出率(%)	13.3	0.0	33.3	25.0	75.0	10.0	0.0	0.0	0.0	25.0	0.0	20.9	18.3			
	エンテロ	コクサッキーA6型			1		2							3	3		13.0
		コクサッキーA9型					1	1						2	2		8.7
	アデ	アデノ2型	1										1	1	4.3		
		ノロウイルスGI型	1										1	1	4.3		
		ノロウイルスGII型	1										1	1	4.3		
		RSウイルス	1		1	1					3		6	3	26.1		
	小計	4	0	2	1	3	1	0	0	3	0	14	11	60.9			
細菌	被検患者数	27	0	1	0	0	5	0	0	0	1	0	34	31			
	検出患者数	4	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	6	4			
	患者当たりの検出率(%)	14.8	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	17.6	12.9			
		黄色ブドウ球菌	2										2	2	8.7		
		下痢原性大腸菌	3		2						2		7	3	30.4		
		小計	5	0	2	0	0	0	0	0	2	0	9	5	39.1		
合計	9	0	4	1	3	1	0	0	0	5	0	23	16	100.0			

表 9 年齢階層別病原体検出状況(小児科、インフルエンザ、眼科、基幹定点)

令和3年1月～12月

年齢		0歳	1~4歳	5~9歳	10~14歳	15歳以上	計	病原体検出比率(%)	
総受付患者数		27	14	8	10	1	60		
検査材料	ふん便	9	6	7	8	1	31		64
	鼻咽頭ぬぐい液	12	8	0	1	0	21		
	髄液	10	0	0	0	0	10		
	咽頭うがい液	0	0	0	1	0	1		
	気管吸引	0	0	1	0	0	1		
病原体検出患者数		4	7	2	1	0	14		
患者当たりの検出率(%)		14.8	50.0	25.0	10.0	0.0	23.3		
被検患者数		27	14	8	10	1	60		
検出患者数		4	5	2	0	0	11		
患者当たりの検出率(%)		14.8	35.7	25.0	0.0	0.0	18.3		
ウイルス	エンテロ	コクサッキーA6型		3				3	18.8
		コクサッキーA9型	1	1				2	12.5
	アデ	アデノ2型		1				1	6.3
	ノロウイルスGI型				1			1	6.3
	ノロウイルスGII型		1					1	6.3
	RSウイルス		2		1			3	18.8
	小計		4	5	2	0	0	11	68.8
	被検患者数		11	5	7	8	0	31	
検出患者数		1	2	0	1	0	4		
患者当たりの検出率(%)		9.1	40.0	0.0	12.5	0.0	12.9		
黄色ブドウ球菌			1		1		2	12.5	
下痢原性大腸菌		2	1				3	18.8	
小計		2	2	0	1	0	5	31.3	
合計		6	7	2	1	0	16	100.0	

表 10 検出方法別病原ウイルス検出状況

令和3年1月～12月

	検体の種類			検出 件数	培養細胞				イムノ クロマト	遺伝子 検査
	ふん便	鼻咽頭 ぬぐい液	髄液		気管吸引	FL	RD-18S	Vero		
エンテロ	コクサッキーA6型			3						3
	コクサッキーA9型			2						2
アデノ	1			1	1					
ノロウイルスG型	1			1						1
ノロウイルスGII型	1			1						1
RSウイルス		2		3						3
合計	3	6	1	11	1	0	0	0	0	10